

ワークショップが個人の課題解決に対する態度に及ぼす影響

松村 千賀

〈目的〉

参加型学習の手法であるワークショップは、学校や地域など多様な組織で、まちづくり、総合学習、など多様な目的で、連携・ネットワークを構築し、現代的課題を解決していくための手法として使用されている。ワークショップに参加すると、参加者との相互作用によって、課題解決に向かう過程が共有され、さまざまな意見から知識が一般化され、行動の変容へとつながることが考えられる(廣瀬, 2000)。

本研究では、ワークショップが、参加者個人の課題解決に対する態度に、どのように影響しているかを会議群と比較し、その効果を明らかにすることを目的とした。

〈方法〉

1. 対象者：H大学臨床福祉学科1,2年141名と臨床心理学科1,2年135名を事前調査から、参加の同意が得られた個人のうち、臨床福祉学科10名をワークショップ群とし、臨床心理学科10名を会議群とし、実験に参加しなかった1,2年をそれぞれ非実験群とした。

2. 手続き

1) プロセス評価シートの作成・検証：ワークショップのプロセスを評価するため作成・検証された。

2) ワークショップと会議実験実施：ワークショップ群と会議群は、事前訓練を受けた同一の進行役と観察者によって進行された。「レジ袋の削減」をテーマとし、ワークショップ群の実験は臨床福祉学部で、会議群の実験は臨床心理学部で行なわれた。

3) 測定材料：①事前・フォローアップ(4週間後) アンケート：ゴミやレジ袋に関する生活行

動を含む意識調査、②事後アンケート：問題への関心、問題の知識、問題に対する対処行動(現状)、③プロセス評価シート：話し合いの中の協力関係、進行役の役割遂行、話し合いの場の雰囲気等

〈結果と考察〉

測定材料からは、ワークショップ群・会議群間に有意な交互作用は見られなかった。実験参加者個人においては、レジ袋を減らすための何らかの行動や意識の変化が見られたことや、非実験群の結果からも本研究では、行動変容のために良い話し合いが行われたことになる。ワークショップ・会議の話し合いにおいての発言数では、ワークショップ群平均発言回数3.2回(SD=1.23)に対し、会議群発言回数15.2回(SD=8.56)であった。ワークショップにおいては、発言回数は少ないものの対等な発言機会を利用して効率的に話し合いが行われた。

一方ワークショップ・会議非実験群においては、事前アンケートでレジ袋を1週間に受け取る枚数に有意差があり、レジ袋を受け取るかどうかで、有意な偏りが見られたものの、フォローアップアンケートでは有意差や有意な偏りが無くなっていた。今後この変化に対する検証を行っていく必要がある。

〈主な文献〉

中野民夫(2001). ワークショップ ―新しい学びと創造の場― 岩波新書.

Chambers, R. (2002). Participatory workshops. Kogan Page Ltd.: London. (チェンバース, R.

野田直人(監訳)(2004). 参加型ワークショップ入門 明石書店.